吉備国際大学研究紀要
（人文・社会科学系）
第26号，91－99，2016

日時の表現に関しての再考察　２

平見　勇雄

Study on exceptional examples appearing in the forms called possessive genitives and of-genitives 2

Isao HIRAMI

Abstract

The concept of “possession” is closely related to such concepts as part-whole relation, kinship relation. So it is comparatively easier to explain the relationship between the meaning and the form-that is-why part-whole relationship is expressed in the same form as possession.（cf. John’s book, John’s hand ）

The expressions with time and date, however, seem to have nothing to do with the concept of possession. As English has established the contemporary usage, the forms and the meanings have had stronger relationships with each other, as opposed to other languages such as Japanese. So there seems to be a good reason why temporal expressions are expressed in a given form respectively, as the forms which represent the relationship between two things are limited.

The aim of this paper is to elucidate why temporal expressions are expressed in a certain way.

Key words：exceptional examples, possessive genitives and of-genitives, temporal expressions
キーワード：例外的用例，所有構文，日時表現

はじめに

英語の所有構文の研究はLangackerやTaylorをはじめ，認知言語学，生成文法の立場から多くの研究者によって行われているが，どの立場からアプローチしても，日時に関する分析は難しい問題をはらんでいる。たとえば認知言語学の観点からNikiforidou（1991）は所有構文を所有という概念からさまざまな用例を分析しようとする研究者もいるが日時との関連を説明できていない。

これまでも日時の表現に関しての説明を試みてきたが（平見：2004），新たに関連を指摘することで

吉備国際大学アニメーション文化学部
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
Kibi International University
8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan（*716-8508*）

この問題を再度考察してみたい。

1　これまでの説明による欠点

いくつかの定型化した表現や日時の表現を除けば，多くのA's Bの形式で表現される用例の間に共通項を見つけることは可能である。既にLangacker (1993) やTaylor (1989b) によってこの形式のスキーマ（共通的特徴）は提示されている。前者はAの方がBよりも顕在性が高いということ，後者はAにはBを特定する機能があることが指摘されている。

これ以外にAが生物（典型的には人）の場合ほとんどA's Bで表現できることから「所有」という概念と結びつき，そこから部分全体関係や親族関係の例と連続性を見つけるNikiforidou（1991）のような研究者もいる。しかしAが生物との類似点や関連性のない無生物の場合は，日本語以上に「所有」の概念が広い英語であっても，すべてを所有の観点から説明することは難しい。

このことを少し詳しく説明すると，英語は日本語と比べ，より広範囲にhaveやwithが使われる。日本語はbe言語，英語はhave言語という言われ方をするが，これは日本語なら「私には二人兄弟がいる」と「いる」を使うが（存在のbe動詞），英語なら「I have three brothers.」のようにhaveを使う。[1] 無生物が主語の場合もThis table has four legs.のようにhaveが使われる。兄弟の関係は親族関係だがhaveが使われ，主語が無生物の場合であってもtableとlegsの関係にhaveを使う。このことからも英語の所有の概念の広がり方は日本語とは異なっていることがわかる。それでもこの所有の概念を広げ日時の表現と関連を見出すことは難しい。

日時の表現がなぜA's Bで使われることになるのか。今見たように所有の概念の延長で時間表現を説明することには無理がある。

もう一つ，所有の概念の拡大や派生という点から用例を説明しようとすると次のような問題にぶつかってしまう。以下のような所有代名詞の場合である。

The bag is John's.　*The brother is John's.
*The leg is John's.

概念上相互間につながりがあるという点からA's Bの例を説明するなら，なぜこのような用法の場合は違いが出るのかを説明する必要がある。文になると連続性が見られないのに，なぜA's Bの場合だけは連続性で説明するのか，その関係性が見つけられない。

決して概念上のつながりを否定しているのではない。所有関係と生物の部分全体関係が同じA's Bという形式で表される理由は概念上のつながりが関係していると直感的にも感じられるからだ。しかし所有を中心としたつながりからは日時の表現の説明は出来ない。

そこでA's Bの形式に，なぜ時間の表現が許されているのか，再度説明を試みたい。

2　二つの「もの」と「もの」を結ぶ三つの形式

具体的な存在物間の全体と部分の関係を表現する場合，多くはAが人であればA's Bが，Aが無生物であればB of Aが使われるが，全体と部分を表す形式は実際はこの二つの形式だけではない。二つの概念の関係を表す形式にはもう一つ，ABという表現形式が存在する。そこでABの形式も入れて議論していきたい。

結論から先に言えば，ABとは基本的に確立した表現を表すときに使われる形式である。たとえばA，Bがそれぞれgirlとfriendという語ならABの形式で表されることがある。以下の例を見ると二つの名詞の組み合わせが我々の日常生活でどのようなものとして認識されているかによって，AとBの関係は三つの形式それぞれが担う特徴に一番適切と言えるもので表現される。だからAとBがどれも部分全体関

係に分類される関係であってもAに来る名詞とBに来る名詞の組み合わせがどういう関係にあるか，社会の中でどのような地位を確立しているかによって形式の選択が決まる。たとえば以下の表現はどれも部分全体関係だ。

John's hand　a door knob　many of us

それぞれの表現がなぜその形式で語られるのかは，これまで多くの研究者が議論してきたAとBの間に見られる意味関係も重要であるが，それ以外の要因も影響していることがわかる。顕在性の高い（全体にあたる）人から，顕在性の低い部分を特定する関係はA's Bで表現される。またAが人であってもBを特定しないならB of Aが使われる。そして物の全体と部分の関係も基本的にB of Aになるが，すべてB of Aかというとそうではない。door knobのようにdoorとknobが部分全体の関係であっても二つを並べると一つの語として確立している表現はABの形式が使われる。そこでABの用例を少し見ておきたい。

3　ABのスキーマとその他の例外について ―習慣的な影響―

日時の表現はA's B，AB，B of Aの三つにまたがるためABの特徴を概観するが，ABの例はSwan（1985：424）によると次のようなものに分類されている。（それぞれの例を一部抜粋している。）

1　Place : a Sussex man　Oxford station
2　Time : a day bed　afternoon tea
3　Material : an iron bridge
　chocolate ice-cream
4　Functional relationship : a book-case
　a conference room
5　Direct object : adult education　a blood-test
　an animal trainer
6　Complement : a woman driver
　a girl-friend　a frogman
7　Part : the table leg　the car door
　a door-knob
8　Measurement : a ten pound turkey
　a five-litre can

Swanの分類が妥当かどうかの検討はさておき，ABの用例の特徴は当然のことながらA's B，B of Aとは異なっている。A's Bと比較するとAが主として人（生物）に限られていたのと違い，Aには人も無生物も来る。6のa woman driverやa girl-friendの例からもわかるように，AがBより顕在性が高い性質を必ずしも持っているわけでもない。またB of Aの形式のようにA，Bの名詞の間に共通の意味関係を見い出せるわけでもない。

併存する形式がそれぞれ独自の特徴を発達させていく点から言えば，ABの形式がA's B，B of Aと違う方向に動いていったのは当然だが，このような例からABの形式の特徴を一言で言えば，一語とみなすことのできる確立した表現がこの形式に落ち着くということである。Swan（1985：422）はAとBに同じ語がAB，A's B，B of Aの間でそれぞれ使われた場合の違いを以下の例で説明している。

dog's food　dog food
a matchbox　a box of matches

A's B，ABの比較ではdog's foodが個別の犬の餌を意味するのに対し，dog foodは一般的に知られている決まった犬の餌についての表現である。一方B of Aと比較した場合matchboxが箱の種類の一つを意味するのに対し，a box of matches（Aが複数になっていて必ずしも同じではないが）は箱に入ったマッチについての記述である。

一方で，二つの形式が同時に存在し，同じ意味を表すものがある。

Goat's cheese　a doll's house（British）
Goat cheese　a doll-house（American）

アメリカ英語，イギリス英語という違いで表現の異なるものもあるが，これらは同じ意味でA's Bで

表されているものもABの意味を持つ。意味的な点から言えばABで表されるはずなのにA's Bの表現が使われているのだ。

この例は一見不規則な反例に見えるが，人間の心理的な類推が影響している。Goat cheeseの例を考えてみるとcheeseはヤギからだけ作られるわけではなく他の動物からも作られる。いくつかのチーズのタイプの中の一つに過ぎないので定形化したものという文化の慣習が浸透している場合ABの形式で表される。しかしgoatは生き物であるから人や生物がAに来る特徴を持つA's Bもまた，表現できる条件を満たしている。こういった類推から二つの表現が存在するのだろう。

これに関連することなので付け加えると，Taylor（1989b）ではA's Bの形式のスキーマを探る際，二つの用法を例外として分析対象から外している。二つの用法の一つはdescriptive genitiveと呼ばれている例でa women's collegeのような表現である。日本語訳だと「女子大」という一つのタイプを指すので，ABで表現される類いのものだがAが人であることからA's Bが使われている。Goat cheeseの例もそれと同じ心理的作用が働いているものと考えられる。

このように，本来ABで表現される内容であってもA's B，ABの二つが同時に存在するのは，A's Bの形式が担うAの性格の類推から使われていると考えられる例もあるのである。そしてこれら二つのどちらが好まれるかはそれが習慣的にどの程度社会に定着しているかも影響しているだろう。

ABで表される表現が一つの定着した概念を表すと言える根拠として，Swanが８つに分類してある表現のいくつかは，一語で表現されたり，ハイフンでつなげられていたり，完全に二語であったり，表記にバリエーションがある。たとえば次のような例である。

head master　head-master　headmaster

これは書き言葉として語がどの程度一語として定着しているかを表している。一語で表記されている場合は二つの語が組み合わさったという意識より，既に一つの概念と意識されている方が強い。一方，二語で表されている語はまだ二つの概念が組み合わさって成立している認識が強いということだろう。ハイフンの入っている表記はその中間段階に位置するものと捉えられる。

一語として確立しているかどうかは，社会の中でその時代に，あるいは個人に，どの表記がどの程度定着しているかによる。いずれにしてもABの形式の特徴がこのような例からわかる。

この点から日時に関する表現が，それぞれの形式で表される例とどのような共通性を持ち，形式が担う特徴に適合しているのかを見ていきたい。

４　有限個の形式の中でどの形式が表現する際選ばれるか？

個々の表現とどの形式が適切かの検討に入る前に，形式と表現との間の関係を確認しておきたい。

語と意味の対応関係がどのようなものになっているかを大雑把に言うなら，少なくとも次のようなことが言える。一つの語に一つの意味しか対応しなければ，意味の数だけ語が必要ということになり，人間の記憶に大きな負担がかかる。逆に一つの語があまりにも多くの意味を持つと，どの意味で言っているのか混乱する場合が生じ，コミュニケーション上大きな障害となる。したがって，すべての自然言語で意味と語の関係はこの中間的な段階に落ち着いており，両者の合理的バランスの上に成立していると言える。

これを解決する仕組みが，まとめられるものは一つの語で表現することである。さらに類似性を見出せる二つの関係に一方の表現を当てる比喩もそれだろう。比喩表現は物事に新しい視点を与えたり新鮮な捉え方を提供する効果を持たせるものとして普通理解されているがLakoff and Johnson（1980）に紹

介されているように，我々が普段気付かないほど習慣化されたものもある。たとえば時間は抽象的な概念なので具体的なもの（お金）に見立てて理解する一面がある。英語に限らず日本語の表現も同じで，お金をあげる，お金を使う，お金を浪費する，お金を投資する，等の表現は，時間をあげる，時間を使う，時間を浪費する，時間を投資する，のようにそれぞれ応用されている。これは同じ言葉で別の事が理解できる合理性だけでなく，抽象的な事柄を理解しやすいという二重の利点がある。言葉が少なくて多くのことが理解できるなら，それが最も合理的，経済的ということになる。

これは語に限らず，所有構文をはじめとする形式や文にも反映されている。文の場合は，語と違って数がはるかに限られているため（英語の形式は基本的に５文型）この５つの中で意味との結びつきを成立させようとするなら，何らかの共通性が少しでも見出せれば最も近いものが選ばれ表現されることになる。英語は他動詞構文を中心とする言語であるが，無生物を主語とする擬人的表現が日本語と比べると多いのは，出来事のあり方と形式の間の関係に類似性を見出せるため，する的形式を「借りて」表現していると考えることもできるのである。[2] つまり新しい形式をどんどん発達させるより，出来るなら限られた有限個の既存の形式にあてはめて表現することのほうが，合理的，経済的であるから，こういった表現をうまく使いまわしているのだろう。

文の例にも，この経済的，合理的な効率性が見られるならA's B，B of A，ABの表現にも当然同じような効率性が反映されていると考えることができる。日時に関する表現の関係をこの点からとらえ，形式と表現の間に何らかの共通性が見出せるのなら，日時の表現のために特別な形式を生み出すのではなく，従来の形式（つまり三つのA's B，B of A，ABの形式）の中からより近いもので表現される方向に向かったはずである。

これを前提に以下それぞれの形式で表される日時の表現を検討したい。

５　日時の表現とそれぞれの形式の間の関係

日時の表現，特にtoday's newspaperやyesterday's eventのような例はこれまでA's Bの形式の持つ特徴からは説明できない問題だった。これは所有構文の問題だけではなく，同時に，形式と意味の関係を前提にしている認知言語学の観点からも問題である。

以下，これまで（特に４で）主張した言語に見られる経済性や効率性の点から一つの提案として説明を試みたい。

まずABおよびB of Aの形式で表される日時の表現からその手掛かりを掴みたい。ABが使われる代表的な日付に関する表現はMonday morning, Wednesday afternoon, Saturday nightなど曜日とその時間帯に関するものである。この表現はB of Aの形式では使われない。

*on the morning of Monday

*in the afternoon of Wednesday

*on the night of Saturday

一方，月日を表す表現は逆でB of Aの形式が使われABの形式は使われない。

On the morning of July 30

*July 30th morning

On the night of Oct 24　　*Oct24th night

これらはどれもB が午前，午後，夜など，一日のうちの一部の時間帯を表す表現で，AとBの意味関係はいずれも部分全体の関係にあり，意味的にはA's B, B of A，ABのいずれの形式にも見られる意味関係である。

Aが無生物で部分全体関係の意味を担う点から言えばB of Aの形式が受け持つことは理解できる。しかしなぜ月日の表現はB of Aが使われるのに，曜日となるとABの形式が選ばれるのか。二つの使い分

けをうながした要因があるはずである。

それを分けた要因はABの形式の特徴と曜日に対する我々の日常生活のあり方にある。曜日は７日しかない。我々は日常生活で週７日のパターンを基本としていることが多く，週単位をもとに行動している場合が多い。この「規則的な」繰り返しの中で生活を営む感覚が多くの人に定着しているからか，固定した中身となることもしばしばだ。だからon Sundaysのように複数で使われたりevery Mondayのような表現がある。

一方の何月何日のような月単位や一年365日の一日を意味する表現は個人的な事情（誕生日や記念日）や習慣による場合，特別な休日や記念日を除けば毎年同じことがその日に習慣的に起こる意識は希薄である。もちろん職業や人によって異なるだろうが，週単位の行動と比較すれば，曜日のパターンほど社会慣習化されておらず，曜日に従って我々の行動が決まる場合が多い。一年という単位で見た何月何日という点から一日の行動をとることは極めて少ない。

この根底には４で述べたように数の大小と我々の記憶の能力の面が絡んでいる。365日と30日，そして７日では，パターンを作ることや記憶の面でどれが我々にとって，無理のない，適切な数かは明らかである。曜日は多くの人にとって日常生活のパターン化した繰り返しのサイクルとなっていて，なじみがあり一番身近だ。７日という数はサブタイプ的なものを語る上でも適当な数である。したがって固定化した表現を担うABが三つの形式の中では最も適当だと言える。

一年の単位であっても特別な日で恒例化している場合，ABで表現するのも同じような理由からであろう。たとえば以下のような例である。（日本の祝日の例）

Adult's day　National Foundation Day
Green Day　Constitution Day　Children's Day
Marine Day　Senior Citizen's Day
Labor Thanksgiving Day　The Emperor's Day

英語でChristmas eveやEaster morningという表現がABで使われるのも同様だ。また以上の例からわかるように人（生物）からとらえられている日（Adult's Day Children's Day　Senior Citizen's Day The Emperor's Day）にはA's Bが使われている。これは３で挙げたgoat's cheeseの例同様の類推が考えられる。

もう一つの可能性として言っておけば，一年のうちの特別な日は一年に一度しかない。そうなると何百という中での一つなのでA's Bの形式が担う個別的な意味合いが出てくる。つまりA's Bの形式の特徴はdog's foodの例で見たように，個々のBを指し示すが，数が多くなると必然的に習慣的な特徴が薄らぎ，個別の意味合いに近づいてくるのである。だから特別な日というのは表し方によってはA's BからもABからも捉えられる両面性を同時に帯びるため，Aが「人」である場合はA's Bの形式が想起されやすいのであろう。

ではA's BとB of Aはどうか。A's B, B of Aの形式の持つ特徴の違いの一つはTaylor（1989b）が指摘したようにA's Bには基本的に形式自体にBを特定する機能（定冠詞的な役割）があり，それはAの顕在性から生じる機能であった。日本語の例でもわかるが一宮という地名はたくさんある。しかし愛知県の一宮と言えば特定される。常識的な知識，少なくとも話し手同士の間ではおたがいに既知の情報である（と想定しての）語からBを確定するということである。したがってAはBよりもより知られたものである必要がある。英語の場合，AがBの中身を意味する語ではBを特定する機能を持たない。（日本語ではそうではないがここでは議論しない。）それは本来のA's Bの形式には当てはまらない内容となる。Taylorが例外とした２つの用例にはまさにこれが反映されているためにスキーマから外されている。しかしこの二つの用例の一つは説明は可能

であった。先ほどのa women's collegeの例である。ただしもう一つのgenitives of measureと呼ばれるten days' absenceのような例は難しい。こういった例の取り扱いはまだ解決できない。

しかしA's Bの中で一番問題となっているtoday's newspaperのような例はある程度の道筋をつけることが可能ではないかと思われる。

日時と人や物の間の顕在性を常識的に考えれば，日時は抽象的な存在であるから人や物のほうが顕在性が高い。（だからこそ問題であって説明ができなかった。）ただ，概念上は，抽象的なものであっても具体的な存在物とどちらの顕在性が高いかを意識的に変化させることのできる特別な関係でもある。なぜなら我々人間や物は空間，時間の中に身を置いている。出来事も空間，時間の中で起こる。その点から両者の関係を考えると，今述べたように頭の中では日時をより大きな存在として捉えることは可能なのである。抽象性の点から言えば具体的な実体を持つ人間や物より顕在性は明らかに低いが，その時の中に存在していると捉えれば逆転する関係にある。

ただどちらも捉え方によっては可能だと言っても自由に許されているわけではない。どういう場合に通常のＡとBの逆転が可能となるのか。もっと言えば，本来頭の中で概念化しているときにはあり得ない表現でも実際に使われ得るのだろうか。

それは発話時に発話内容が現場（コンテクストやテクスト）に支えられている場合である。本来許されない一つの例（AとBが逆転する全体と部分関係）がLangackerによって指摘されている。全体部分の関係は普通逆転することが許されない。The cat's tailとは言えるが *the tail's catは普通言えない。しかしLangackerは次のような場合なら可能だという。それは道端に猫のしっぽだけが落ちていて猫自体が見えない場合である。

Where is the tail's cat ?

常識的には不可能な表現も現場での支えがあれば表現が成立する場合があるのである。

もう一つがA's Bで表される関係代名詞のwhoseがものに対して使われる場合である。本来*the house's roofとは言えない表現がI live in the house whose roof is red.やIts roof is red.では可能となっているのは，まさにAが人に相当する顕在性の地位を「テクスト上」獲得したことから，A's Bの形を借りて表現されていると言える。

この点で日時に関連する現場の表現と言えば，todayやyesterday（今日とか昨日）等の表現である。月曜日，火曜日のような表現とは違い，todayやyesterdayの特定はあくまで発話現場にいてこそ決まるからである。現場にいることを前提とした表現であるから顕在性が高くなるのである。

こういった特徴から人（生物）ではないもののtodayやyesterdayのようないくつかの日時の表現は人と同様に扱われ得る顕在性の高い地位を得るのだろう。部分から全体を捉えることとか，ものを表す名詞であるのに人に使われる表現（whose）が使われることとか，通常は許されない語からBを捉えることが可能となるのは，まさに話者が現場に身をおいた状況にある場合である。[3)]

Ａの顕在性は人間が人間を中心とした動くものに着目するという生物学的に生まれ持った特徴が根底にある場合と，現場に居合わせることが人にとって一番顕在的である場合という，それぞれに異なった理由ではあるが，生物の関心を必然的にそこに持っていく，集中させる点で共通している。それが，違った特性のＡをA's Bの形に集結させているのである。

４で述べたように英語は有限個の形式を使って，あるものとあるものの関係を表現する言語である。A's B，B of A，そしてABの形式の特徴と日時との関係も今述べたような共通点を見出すことが出来るため，経済性の点から別の形式を生み出すことなく，既存の形式を使って表されると考えられる。しばしば使われる表現，たとえばWednesday

morningなどの表現は決まりきった表現としてABが使われることは先ほど述べた通りである。この意識が昨日，明日のような現在地点を軸とした表現ではあっても頻繁に使われ，決まりきった表現として定着すればYesterday morningや tomorrow morningのようにABの形式で表される。

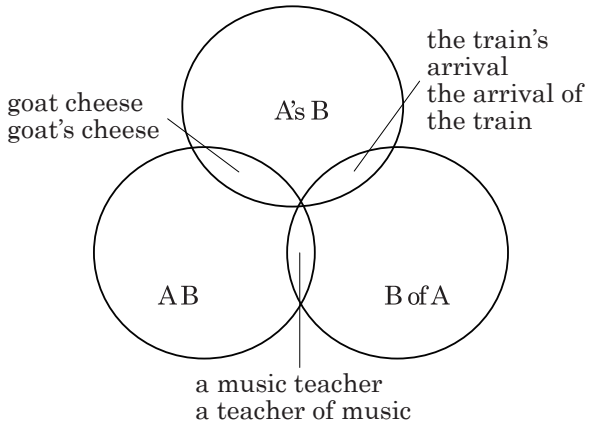
またtodayやyesterdayが使われるといっても，これらの語が一つのタイプを表す，象徴的な意味合いで使われる場合（したがってBを特定しない，内的な意味で使われる場合）はB of Aの形式が使われる。

Today's newspaper	an artist of the year
Today's menu	a man of today
Yesterday's events	a man of the week

それぞれ右は「今年を代表するアーティスト」「今日話題になった人」「今週を象徴する人物」という意味になる。AとBの関係を担うA's B, B of A, ABの三つの形式のどれがふさわしいかは，それぞれの形式の特徴に，AとBの関係から出てくる内容が我々の日常生活でどういう位置を占めるのか，それがBとどういう関係になっているか，そして他のAとBを表す関係とどうつながっているかによって決まるのである。

まとめ

A's B, B of A, ABをごく簡単な図としてまとめてみると以下のようになる。



この図には形式が分化し，特有の意味を帯びる前にイディオム化されてしまったと思われる例（a stone's throw等）は含まれていない。それぞれの形式が特有の意味を持つに至ったことで，その形式にもっとも合った（あるいは近い）AとBの関係が一つの形式で表される。しかしAとBのあり方は一つしかあり得ないとはっきりわかるものから，ファジーなものまでさまざまである。ファジーな場合は二つの形式で表されることが可能であろうし（たとえば動詞派生名詞の例：the train's arrival VS the arrival of the train），どちらからの拡張ともとれるような場合（goat's cheese VS goat cheese）には，両者が共存し，文化圏や個人の好みによって一方だけ（あるいは両方）が使われるようになるのだろう。もちろん形式が異なれば意味も異なるというテーゼに従って，これら二つの形式が並存する場合，何らかの意味の差があとで生じたり，一方が古い表現と感じられるようになって廃れていく可能性も大きい。（たとえば動詞派生名詞においてA's BではAがBの主語, B of AではAがBの目的語になる場合が多い。）

すべての例をここで網羅しているわけではないし説明できるわけではない。しかし形式と意味が相関関係を強め，一体となる方向に進んできた英語においては限られた表現形式の中でそれぞれの形が担う意味に接点のある二つの関係が表現されるようになった。日時に関する表現もまた語の特性，語と語の関係から３つに振り分けられるようになったと考えられるのである。

（この論文は2005年に紀要に発表したものに加筆，訂正を加え，新しい主張を盛り込んだ内容である。）

注

1　日本語でも「素敵なお孫さんをお持ちで」とか「すごい腕を持っている」のようにhaveに当たる「持つ」が使われる。ただし英語と違って，特別な場合に限られる。しかしこの例からも日本語にも所有という概念との関連性はあることがわかる。

2　The rain prevented us from going out.やWhat made you think so ?などはそういった例である。詳しくは池上（1991）のⅡ意味と文法の動作主の表現と擬人法を参照されたいが，出来ごとが起こる場合，自分たちの意思や考えでそうなったのではなく外的な要因がそういう事態を招いたと捉えられる場合，他動詞構文で表現する。

3　なお英語ではTomorrow never knows.とかThe 18th century saw the American Revolution.のように日時が主語として表現される例がある。TomorrowとThe 18th centuryでは現場との関わり方が違うため詳しくは今後を待たないといけないが，日本語と違い，人と日時とは何らかの接点があるのではないかと考えている。

参考文献

池上嘉彦（1991）「英文法を考える」 筑摩書房

平見勇雄（1997） John's picture, a picture of Johnにおいての解釈の違いはなぜ生まれるのか —認知言語学的観点からの説明— 吉備国際大学社会学部紀要 7，279-284.

平見勇雄（1998） Of-genitiveのスキーマに関する一考察 英語表現研究 15，79-87.

平見勇雄（1999） 英語所有構文の形式の相違点 吉備国際大学社会学部紀要 9，61-66.

平見勇雄（2003） 英語の所有構文をめぐっての疑問（２）—A's B B of Aとそれに対応する日本語の「AとB」の比較—吉備国際大学社会福祉学部紀要 8，55-66.

平見勇雄（2004） 英語所有構文の性質に関しての再考—A's B，B of Aの両形式で表される表現との比較から—吉備国際大学社会福祉学部紀要 9，9-17.

Deane, Paul（1987）"English Possessives, Topicality, and the Silverstein Hierarchy", BLS 13, 65-76.

Lakoff, George and Mark Johnson（1980）Metaphors We Live by, The University of Chicago Press, Chicago.

Lagnacker, Ronald（1993）"Reference-Point Constructions", *Cognitive Linguistics* 4-1, 1-38.

Nikiforidou, Kiki（1991）"The Meanings of the Genitive : A Case Study in Semantic Structure and Semantic Change", Cognitive Linguistics 2, 149-205.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik（1972）A Grammar of Contemporary English, Longman, London.

Swan, Michael（1980）Practical English Usage, Oxford University Press, Oxford.

Taylor, John R.（1989b）"Possessive Genitives in English", Linguistics 27, 663-686.

Taylor, John R.（1994）"Subjective and Objective Readings of Possessor Nominals", Cognitive Linguistics 5-3, 201-242.